

# ライジングSUN

2012年 9月号

特定非営利活動法人 SUN

TEL 03-3712-0653 FAX 03-3791-6076

<http://sun1991.net>

## 江口さんのマイストーリー

江口賢次さんは、SUNに設立当初から関わっていただき、運営委員長も務められた方です。今年の3月6日に惜しくも他界されました。故人の徳を偲び、SUN設立20周年記念誌所収の「江口さんのマイストーリー」を、抜粋して掲載します。

### 第1回

生い立ち 石神井学園のころ

**聞き手：**今日は平成23年8月23日、火曜日です。SUN20周年記念誌の発行について、江口賢次さんのご協力をお願いしたいと思います。お聞きするのは江口さんのマイストーリーで、回復の道のりをお話いた



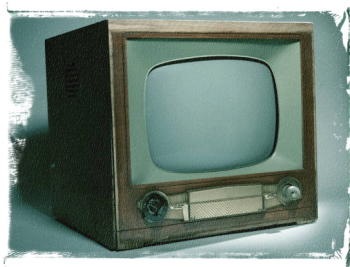
だければと思っております。最初に、江口さんの生い立ちを聞かせていただけますか。

江口：自分の生い立ちっていうか、昭和26年、たしか3月か4月のことだと思うけども、4歳のときに上野公園で保護されて、台東相談所という所に行ったらしい。それは俺の記憶にはないけども。その当時、子供の浮浪者が、戦後まもなくだから、相当な人数がいた。

それで、台東相談所から振り分けられて、東京の練馬の石神井学園という養護施設に行くと。中学校を卒業するまで11年間、児童が300人ぐらいいて、その中で、好むと好まざるに関わらず団体生活が身についた。

学園には親兄弟がいる人といない人がいて、たまに親元に帰る児童もいた。それが子供の頃、とてもうらやましくてね、お父さんお母さんのところへ帰れるって。指をくわえてというんじゃないけど、寮母さんに食ってかかって「何で俺はお父さんお母さんが迎えに来ないんだ」って、そんなことを言っていた記憶があるよね。

小学校5年生の時、学園の300人の中から俺ともう2人、合わせて3人で親を探すテレビ番組に出て。司会者が、「日真名氏飛び出す」って



いう番組の主人公の、末井とか平井だとかいう、俺が知っている顔の人だった記憶がある。

学園生活の中では、暴力沙汰も相当あった。でも、個人的な寂しさ、妄想だとか空想だとかは持っていたけども、それを打ち消してくれたのは、結局、ああいうのを仲間というのかな。同じ児童の中で、結構エンジョイしてた。先輩に殴られたりしたけども、同じ境遇は俺一人じゃないっていうのを、同じ学年の彼らに教えてもらったというか、共感を呼ぶというかね。「俺一人じゃないんだ」という気持ちが、

その頃からあった。

当然、ああいう施設だから、酒もタバコもあるわけない。でも、中学を卒業するまでは、隠れてタバコを吸ったなあ。それぐらいのものかな。クラクラっときて倒れて、畑で寝てた覚えがある。学校は学園の中じゃなくて、外の、町の学校に通学していたんだけど、町の連中は「学園ちゃん」と、あまり一緒に遊んだりはしなかったね。

聞き手：学園ちゃん？

江口：「学園ちゃん」って町の人に言われていたから、施設の子供は。「学園ちゃん、学園ちゃん」ってね。いわゆる普通の人の友達というのはできなかつた。結局、遊ぶにしても悪さするにしても、学園の中でやっていたね。

小学校1年生のときかな、先輩が給食費を集めたやつを「お前、かっぱらってこい」って俺に言うわけよ。先生が集めた給食費が引き出しの中にあつて、それを取って先輩に持っていったことがある。それが初めての盗みといえば盗みか。で、そのままそっくり先輩に渡した。その先輩、俺もよく記憶にないけれど、それから、強制的にどこか連れていかれちゃったんじゃない、盗みがばれて。上の大きいお兄ちゃんたちが、下に「これやれ、あれやれ」って言ったら、絶対服従だからね。寮母さんがいるけど、寮母さんに服従じゃなくて、上のお兄ちゃんたちに服従する。断ったら、そのときは暴力沙汰だから。

でも俺が中学の、一番上の年長になったとき、俺は殴らなかつたな、あんまり。下の子は皆「江口賢ちゃん、江口賢ちゃん」って慕ってたね。何でなんだろうなと思うけど。先輩に殴られると、子供の頃泣いたけどさ、「俺ならこんなことで殴んねえな」と思って。そんな些細なことなんだろうけどもね。

ただ、ソフトボールの大会が、各寮対抗で毎年8月30日にあるんだけどね。(学園の子供が)300人で、一部屋20人の寮が15寮あつた。

敷地が広いから点々とあって。それで、8月30日に各寮對抗のソフトボール大会というのがあるわけ。そこから野球に目覚めたのかな、俺が一番上になって、先頭を切って。ソフトボールのときだけは、エラーなんかすると、すぐ殴っていた（笑）。だから下級生は「そのときだけが怖い」って言っていた。普段は、そういう些細なことで殴ったりはしなかった。



学園の中で慰問があつて、双葉女学校とか、クリスマスのときにプレゼントを持って来た。米軍キャンプの朝霞駐屯地から、兵隊さんがアメリカの物資を大量に持ってきて、ジャンパーだとか、着るものとか。あと、天皇陛下が来たり。歌のダイアナなんかも来たり、「ララミー牧場」のスリムとジェスが来たり。そういう慰問が楽しみだったね。米軍キャンプの子供たちが、ゆで玉子に絵を描いて持って来てくれるんだけど、玉子なんて昔食べなかったでしょ。あれが嬉しくてなあ。

後は、石神井学園の中にグラウンドがあつて、大泉東映撮影所が近くにあったから、グラウンドを撮影に貸すわけよ。力道山とか、堺駿二だとか若手の俳優が来て撮影していた。その見返りとして、1年に2回、講堂でチャンバラ映画を見たことがあるね。「鞍馬天狗」だとか。チャンバラを見ると、皆、棒切れでチャンバラごっこなんかしたな。

振り返れば、親がなくとも子は育つて。そりゃあ、個人個人は違ふだろうけど。それぞれの思いがあつたにせよ、社会で生きているんだろうな、今は。

中学校の2年と3年で寮替えがあつて、男女別々になった。それまでは男女20人で一緒だったから、これはまずいというので、国の方から「男女別々に生活しなさい」って。そのときの寮替えで、「蒲田お母さん」という人にお世話になったんだよね。

**聞き手：**蒲田お母さん？

江口：駅の蒲田。あのお母さんが、まだ生きているって、友達経由でわかって、今年の4月に、友達と二人で蒲田お母さんに会いに行った。蒲田お母さんが98歳で、妹が95歳で、初めて老々介護を身近に感じた。お母さんは座ったきりで、コタツで話したけど、俺のことはよくわからないみたい。でも、当時の学園のことは話していたね。

聞き手：「蒲田お母さん」は、寮母さん？

江口：寮母さん。今となっては、奇跡だろうな、ちゃんと合わせてくれたんだから。

それはさておいて、でも学園は良かった。大親友が一人できたからね。今でもその男とは付き合っているけど。それが、漫画家。あいつは、まあ成功したよね。中学を卒業したときに、そいつと約束した。「俺は漫画家になる。江口は何になるんだ」俺は印刷屋に就職が決まっていたから「俺は印刷屋の工場長になる」って。そんな約束をして、学園を去ったんだけどね。 (続く)

## 通所者の方の体験談

### 仕事と酒

SUN 利用者

「俺が働いた金で飲んで何が悪い。」「取り分を何に使おうが勝手だろう。」「飲みたいんだから放っておいてくれ。」「仕事に行けばいいんだろう。」「もっと余裕があるはずだ。何に使っているんだ。あんたのやり繰りが下手なんだ。」「俺が稼いだ金なんだから、俺にもっとよこせ。」

とにかく、金に執着していました。大半が飲み代などの遊興費に消えて行くことには完全に無頓着になっていました。その為の仕事でした。働き始めたこ

ろは決してそんなことは無かったのに、もっと『ましな目的』があったはずなのに。飲みたい、遊びたいという理由で働いていました。少し余裕が出ると気が大きくなり、無くなると子供の教育費にケチをつけ、子供の貯金箱を漁り、家内の財布から抜く。悪いと思っても、「俺が稼いだ金なのだから」と自分を納得させる。

『仕事が終わった後の一杯が習慣になり、仕事終了が引き金になる』などと言うことは、とっくに通過し、とにかく飲みたい。もう、どうでも良くなっていました。家庭もどうでも良くなっていました。仕事もどうでも良くなっていました。でも金は欲しかった。

一方で、休職期間や失業中、転職後落ち着くまでの間など、経済的に不安定な時は、おかしい自覚が出て、酒を控えることが出来た時期もありました。「今は『稼ぎがない』のだから、我慢しよう」と。

仕事による収入、報酬はとても重要な価値基準でした。収入の多寡は、社会的評価を客観的に表現してくれ、「自由さ」や「豊かさ」や、更には「権利」が付いてくると考えていました。でも、結局、そんなこともどうでも良くなってしまいました。とにかく、酒を飲むことに比べると、あらゆることが二の次になっていました。

酒が入っていない時の私は、掛け目はあるものの金にはなる。でも、ひとたび酒が入ると損害しか与えない。それまでの実績を総動員してもマイナスになるほどの損害を与える。そのことに気付くのに時間がかかり過ぎました。

さて、ここまで書いてきて、いったい私は何を言いたいのか。それは、こんな心配です。「再び稼ぎ出した時、つまり働き始めた時に、この1年間私は生活保護を受けているのですが、経済的なアプローチから、酒を飲んでも良いという考えが強くなり、それが、病気であるという事実勝ちやすいか」と言うことです。全くもって相変わらずの発想です。ありもしないことをあれやこれやと考える。余計なことに気を回す。そんな性格は変わっていません。1年経っても、結局、「意地と根性」で飲んでいないだけなのではないか。進歩の無さを感じま

す。経験の範囲から抜け出せないのです。

このことをこの原稿を提出する前に仲間に話しました。笑われました。「どうしてそんなことに気が行くのか理解できないね」、「もっと前向きにとらえたらいいじゃない」、「発想に広がりがないんだよね」と。

そう。おっしゃる通りです。でも、変えられないのです。色々なことが、以前の姿のまま、出番を待っている気がしてしまいます。正に、「受け入れる落ち着きと、変えていく勇気」の両方が求められる局面です。

2012.09.02 ワンデーから 375 日目

## 2012 年 8 月の主なプログラム

○2 日(木) 7 日(火) 29 日(水) SUNの夏休み

○11 日(土)開所日、ランチ・ちらし寿司

25 日(土)開所日、ランチ・カツ丼

○20 日(月) 半日外出・しながわ水族館

○22 日(水) 調理講習会 野菜たっぷりスパゲティミートソース、グリーンサラダ、わかめ卵スープ、コーヒーゼリーを皆で作りました。

## 2012 年 9 月の主な予定

◆12 日(水) 音楽教室

◆21 日(金) 体操教室

◆23 日(日) リカバリーパレード

アルコール等依存症からの回復には、同じ病気から回復したいと悩んでいる人達との交流、グループが必要です。

SUN プログラムでは健康な生活や習慣を取り戻すために、ミーティングやグループ作業等が組み立てられています。地域社会に戻れる生活の基礎作りと、生活習慣の回復を目指します。

**特定非営利活動法人 SUN**

**TEL 03-0712-0653**

**9:00AM~4:00PM**

〒152-0001

東京都目黒区中央町2-32-5 スマイルプラザ中央町4F  
(旧第六中学校)

東急東横線 学芸大学駅下車 徒歩7分

東急バス 五本木バス停 徒歩8分